

ごあいさつ

## グループ活動について

会頭 黒田 長久

最近、本会の大会が充実してきましたのは、役員の方や地元の方々の学会運営のご努力と手馴れてこられたことにもよりますが、“学会レポーター”も広くなり研究の質、量とも増えてきたためと思います。そこで、将来の発展を考えますと、各研究者が今まで通り各個により深く、より広く仕事をされていかれることが勿論中核となりますが、いろいろな形でのグループ活動が必要となるでしょう。そして、すでに共著論文も多くなっており、その傾向がみられます。

このグループ活動を分類してみますと、(1)種(species)グループ (2)課題(thema)グループ (3)学際グループ (4)国際グループ、などが考えられます。種グループは、すでに発足したモズグループ(“モズシンポジウム”, 鳥学会ニュース10号)をはじめ、ムクドリグループ、

カラスグループ、カラ類グループ、海鳥グループ、といった工合です。

課題グループでは、生態研究グループとか、渡り研究グループその他、学際グループでは、ある分類群(例えば、ガンカモ科)について形態、生態、行動、渡り、生理などの専門分野の人々が(鳥学者以外も含め)その進化、系統などを総合的に再検討するような協同研究もその一つ、国際グループでは、日米、日ソ、日中、日豪などの渡り鳥、危機鳥類保護の協定があり、ICBPでは、孤島の鳥相、熱帯林の鳥、海鳥、そして保護を要する目や科の鳥類(例えば、オウム類、ツル類の各グループ)について協同研究のワーキンググループが発足しています。

このように、これからは鳥の研究も研究者間の連絡、他学会との連繋、外国鳥学会や鳥学者との交流が増えてくるでしょう。この7月には、ソ連の学者の訪問(5頁参照)もあり、鳥学会の国際活動への新時代が訪れようとしています。会員諸兄の御奮発を期待致します。



1982.11.21 仙台にて

## 極東鳥類研究会の活動

藤 巻 裕 蔵

研究会は発足してからまだ1年たっていない。活動といってもまだ少ないが、ニュース担当者からの依頼により、活動紹介をしてみよう。なお、研究会の発足についてはニュース610に述べてあるので省略する。

今のところ、研究会の主な目的は極東の隣国間の鳥学に関する情報の交換にある。これまでにニュースレター（英文）を2回発行し、日本の主な研究者、ソ連極東の研究者の研究テーマ、連絡先、個々の研究者の研究紹介、文献リストを情報として提供している。日本の研究者がより詳しい情報を得るという点では、国外の研究者に論文を日本の雑誌に投稿してもらうのが一番よいが、今すぐ実現ということは困難である。そこで現在は、ソ連の鳥類について紹介した資料のコピーサービスと最近のソ連の資料の中からわれわれにとって興味あると思われるものを訳して、ニュースレター付録として会員に配布している。

情報の交換の一部として、出版物の交換を行っている。これまで研究会に送られたものには「ソ連の鳥類—研究史、アビ目、カイツブリ目、ミズナギドリ目」（1982）（この文の最後に内容紹介をする）があり、会員に貸出しも行っている。また日本側からは交換で「鳥」などを送った。ソ連極東地方の鳥相について出版されたものは、いままでにかなりある。これらについては、私のもっている本もふくめ、どのような地域のものがあるかをニュースレターで紹介するつもりである。

以上のような交流を土台として、将来は人の交流、国外での調査、共同研究の実現に発展させることができると考えている。しかし、この段階になるとこの研究会独自の活動として実行するにはいろいろな困難が予想されるので、他の団体、とくに渡り鳥につれて強い関心をもっている団体と協力しながら、実現をはかってゆきたいと考えている。なお将来の活動については、これから徐々にはっきりさせてゆくべき点もあるので、当研究会の会員にかかわらず、多くの方のご意見をうかがいたいと思う。

最後に、ついでながら、情報提供の意味で新著の紹介をしておく。

ソ連の鳥類—研究史、アビ目、カイツブリ目、ミズナギドリ目—（ Птицы СССР. История изучения, Гагары, поганки, трубконосые ），V. D. イリチョフ・V. E. フリント編  
1982. pp. 428. ナウカ出版、モスクワ。

ソ連の鳥類のモノグラフの新シリーズ「ソ連の鳥類」の第1巻である。これまでこの種のモノグラフとしては、デメンチェフ・グラドフ（1951～1954）とイワノフほか（1951～1960）のものがあったが、今回の本はその後20～30年間の研究も含めてまとめられたものである。バルト海沿岸、カルパチアからチュコト、サハリン、千島に至るソ連に生息する全種が含まれるが、第1巻では研究史とアビ目～ミズナギドリ目がまとめられている。研究史は概要に続き、ヨーロッパ地方とコーカサス、ウラルと西シベリア、カザフスタンと中央アジア、中央・東シベリア、極東と5つにわけて地方ごとにまとめられている。なお極東はさらに極東北部、カムチャツカ、アムール川沿い、ウスリー地方、サハリン、千島に分けて述べられている（研究史のうち千島列島については訳をニュースレター62付録に掲載済、サハリンの部分の訳を63付録に掲載予定）。研究の現状については、ソ連を74地区にわけ、目録作成、分類、分布、生態などのそれぞれについて、(1)あまり研究されていない、(2)研究は中程度、(3)比較的よく研究されている、

(4)よく研究されているの評価がなされている。極東では千鳥、サハリン、沿海地方、アムール・ゼヤ地方が<sup>3)</sup>、アムール下流域、カムチャツカ、コリャク地方、チュコト半島が<sup>2)</sup>、オーツク海沿岸地方が<sup>1)</sup>である。各種のモノグラフでは、アビ目5種、カイツブリ目5種、ミズナギドリ目18種、計28種について、形態、換羽、亜種、分布、渡り、生息場所、生息数、繁殖、行動、天敵、産業上の意義が各種平均して6～7ページにわたって述べられており、カラー図版には全種の図のほか、卵、ひなの図がある。なお、各自は分担で執筆されており、分担者はアビ目 V. E. フリント、カイツブリ目 E. N. クロチュキン、ミズナギドリ目 V. P. シュントフである。

(この本をふくめ、研究会の資料を、ご希望者に貸出しいたします。ただし送料は負担して下さい。)

## ソ連邦の鳥類に関する図書・文献案内

長谷川 博

ソ連邦の鳥類に関する標準手引書は、1951～54年に Dement'ev, Gladkov らによってまとめられ、その後英訳された<sup>1)</sup>。これには当時ソ連邦で記録された鳥類各種について詳細に情報が集成されている。ただ、刊行後すでに30年余り経過しているため、最近の情報は他著によって補なわねばならない。

ソ連邦の鳥類を直接取扱っているわけではないが、現在、Cramp, Simmons らの編集で刊行中(全7巻のうち3巻は既刊)の旧北区西部の鳥類手引<sup>2)</sup>は、各種についての新しい知見や、地球規模での繁殖・越冬分布図をまとめているので非常に役立つ。また、山階・松山による文献目録<sup>3)</sup>は、研究を深めたい人にとって便利である。

日本の鳥類と特に関係の深い極東地方の鳥類については、日本語に翻訳され、利用できるものがある。ウスリー地方の鳥類<sup>4)</sup>、南千島の鳥類<sup>5)</sup>などである。読者は、翻訳者に感謝しなければならない。

このほかに調査探検の報告書・記録が刊行されている。<sup>6,7)</sup>

近年の研究状況は、極東鳥類研究会の会報によって概要を知ることができよう。しかし、より詳しく研究したい人は、当然のことだが、まずロシア語を学び、言語の壁をなくすことが必要であろう。それがどうしてもできない場合には、英訳を入手するという便法がある。私の知る範囲では、海鳥やガンカモ、シギ・チドリ類について、利用できる文献目録が太平洋海鳥グループの会報にのっている<sup>8)</sup>。他の仲間についても、どこかにのっているだろう。

- 1) Dement'ev, G. P. & Gladkov, N. A. (eds.), 1951-54. Birds of the Soviet Union. Vols. 1-6 (1966-70). Israel Program for Scientific Translations, Jerusalem.
- 2) Cramp, S. & Simmons, K. E. L. (eds.), 1977-. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa: The Birds of Western Palearctic. Vols. 1-. Oxford University Press, Oxford.
- 3) 山階芳麿・松山資郎, 1973. 近着ソ連邦鳥学関係文献目録. 山階鳥類研究所報告, 7: 113-117.
- 4) ヴォロビョフ, カ. ア., 1954 (高橋清訳, 1977. 78) ウスリーの鳥, 野鳥の生態と分布. 上下2巻499頁. たたら書房, 米子. (合計 4,000円).

- 5) ネチャエフ, V. A., 1969 (藤巻裕蔵訳, 1979) 南千島の鳥類, 200頁. 日本鳥学会双書第17編. 日本鳥学会, 東京(2,000円). ※本書は学会で直接販売している。  
[また, 同氏による記事, ソ連の鳥類研究史・千島列島, Ornithology in the Far East, Newsletter No.2 supplement, p.1-4 (March, 1983)をも参照.]
- 6) 信州大学鳥類生態研究グループ・第1次シベリア調査団, 1978. シベリアの野鳥, 105頁. 自己出版, 松本. [1977年夏の調査報告書].
- 7) 玉貫光一編著, 1980. シベリア東部生物記 - ウスリー地方を中心として, 260頁. 国書刊行会, 東京(5,800円). [1922年夏の調査探検記録, 鳥類は一部.]
- 8) Pacific Seabird Group Bulletin, Vol.9 No.3: 33-39 (1982), Vol.10 No.1. (予定)(1983).

<世界の鳥学者・1> V. A. ネチャエフ博士のこと 藤巻裕蔵



12, 3年前のことになるが, ソ連の研究者から1冊の本が送られてきた。V. A. ネチャエフの「南千島の鳥類」であった。この本がなぜ私に送られてきたのかよくわからなかったが, 内容を見ると私のモユルリ島の海鳥の論文が引用されており, どうもそのためらしかった。ネチャエフ博士と同じ研究所にいるG. F. ブロムレイ博士とは, ソ連沿海地方のクマの本を訳したとき何回か手紙のやりとりがあったので, それで私の住所を知ったのであろう。

これが, その後ネチャエフ博士と文献をふくめいろいろの資料を交換するきっかけとなった。

ヴィタリー・アンドレーヴィチ・ネチャエフ博士は, ウラジオストクにあるソ連科学アカデミー極東学術センター生物学・土壌学研究所の鳥学者である。極東学術センターというのは, 極東地方の19の各種研究所と北極圏のウランゲリ島からビョートル大帝湾のポポフ島(42°N)までの地域の各所にある多くの施設, 数十の観測ステーションから成っている。研究所の多くはウラジオストクにある。生物学・土壌学研究所は, かつては科学アカデミーシベリア支部所属とされていたが, 現在では再編され, 極東学術センターを構成する研究所となっている。

ネチャエフ博士は1956~1967年に, ハバロフスク周辺, キジ湖などアムール下流域地方で調査を行った。この間に得た資料によりチョウセンミフウズラ, コウノトリ, ハヤブサ, サシバ, オオライチョウ, ブッポウソウ, セグロコゲラ, キレンジャク, ヒレンジャクなどの生態に関する論文をまとめている。その他, ベトロハプロフスコエ湖ではカワリサンコウチョウを発見し調査している。沿海地方やウスリー地方の鳥類については, 数種鳥類の分布を明らかにしているほか, ホトトギスの繁殖, ムクドリやエゾセンニュウの生態, コクマルガラスの分類的研究などに関する論文を発表している。生態に関する研究では, 食性に関心をもっているようで, いくつかの論文がある。サギ類, ワシタカ, シギ・チドリ, カモメなどの動物質食鳥類と餌動物としての両生類, 爬虫類の関連についての論文や種子食の鳥類と樹木の種子の関連についての論文である。とくに後者では種子伝播者としての鳥類の役割について論じている。

博士の大きな仕事としては, 南千島とサハリンの鳥類の調査がある。1962 - 1963年の14か月にわたり, 主として国後島に滞在して調査をしたほか, 色丹島, 歯舞諸島にも足をのぼしている。この調査の結果が,

「南千島の鳥類」である。(訳本が日本鳥学会から出版されている) その後1971年から1978年にかけて、モネロン、チュレニー両島を含むサハリン各地で調査を行った。この調査結果はまだまとめられていないが、これまでにメジロの初記録、ニュウナイスズメ、オオマシコ、カラフトアオアシシギの繁殖、カムチャツカアジサシの分布に関する論文が発表されている。いずれこれらの結果は、まとめられるであろう。サハリンの鳥類については、1955年にギゼンコによって発表されているが、それ以後の総合的なものは、このネチャエフ博士の本になる。

昨年モスクワで行われた第18回国際鳥学会で、ネチャエフ博士にお会いすることができた。手紙のやりとり、文献の交換でのつきあいは10年以上になるが、会うのはこのときがはじめてであった。「南千島の鳥類」の訳本を出そうと思って、送ってもらった写真では精悍な感じであったが、昨年会ったときには、眼鏡をかけていたせいか、写真よりずっと温和な感じを受けた。

## 日ソ渡り鳥条約のその後

吉井正

このたび本鳥学会にソ連バンディングセンター所長のイリチョフ教授を招待し、ソ連における研究の現状をうかがったり、鳥類の研究および保護の国際協力について懇談することになった。

こうした国際協力に関して鳥類保護の国際条約あるいは協定がきわめて有効であることは、わが国政府とアメリカ(条約・1972)、オーストラリア(協定・1974)、中国(協定・1981)の各政府との間で締結した条約あるいは協定がそれぞれ著効をあげていることによって明らかである。ところが、ソ連との間では1973年10月10日に「渡り鳥及び絶滅のおそれある鳥類並びにその生息環境の保護に関する条約(付表記載鳥種287種)」が締結されているにもかかわらず、両国政府間の協力はほとんど見られないのが実状である。これは条約の第9条に「この条約は批准されなければならない。批准書はできる限りすみやかに東京で交換するものとする。」という一項があるのに領土に関する問題が原因でいまだに批准されないからである。

鳥学研究あるいは保護の立場からいわせてもらうと、もし両国政府に熱意があれば、条約の内容からして、政治・経済等の難しい点をベンディングにして、批准・発効にまで運び得るように見えるのであるが、外務省や環境庁の係官たちには、今のところそういう意欲はないらしい。しかし鳥類研究保護には国際協力が絶対に必要であり、また親密な協力を行なっているスポーツ等の部門の例もあるので、まず民間ベースで協定の実績を積み重ねようという気持が関係者の間で強く湧き起こった。鳥学会、山階鳥研、野鳥の会などが文献・情報の交換につとめ、また昨年モスクワで開催の国際鳥学会の際、両国研究者が日ソ極東鳥類研究会を発足させたのはそのひとつの現れである。今回のソ連研究者との懇談もこれに続くもので、この機会に両国鳥類研究者の協力が一層発展することが切に期待される。

### トピックス

## ソ連鳥学者の訪日

7月以降、東京ほか各地で開かれる「鳥の世界展」開催のため、ソ連の鳥学者が相次いで訪日しており、7月27日(水)の昼に、評議員藤巻裕蔵・柿沢亮三氏らの呼びかけで日ソの鳥学者の懇談会が東京で開かれる。関心のある方は、柿沢氏(山階鳥類研究所 461-4259)または学会

事務所まで問い合わせてください。ソ連側からは、科学アカデミー標識センター所長イリチョフ博士(鳥類生理学)、タタリノフ博士(古生物学)、スカラット博士(貝類学)が、日本側からは、黒田長久会頭、吉井正副会頭、横田義雄 雁を保護する会代表らも出席の予定。

「鳥の世界展」は、日本対外文化協会・毎日新聞社主催、日本野鳥の会・サントリー協賛で7月22日～8月10日に東京・池袋の西武デパートで開かれるのを皮切りに、札幌・大阪などでも開かれる予定。ソ連科学アカデミーの標本がジオラマで展示され、オガサワラマシコ、オガサワラガビチョウ、フクロウオウムなど珍しいものも持ち込まれる。

(竹下信雄)

Movement

日本鳥学会近畿地区懇談会近況

昭和53年にスタートした当懇談会も5年目の春を迎えました。56年度末までに計13回の例会が開催され、活発な議論が展開されてきました。最近の例会の様子をお知らせいたします。

なお、第8回までの経過は本誌6、7、8をご参照下さい。

第9回例会	S 55.9.28	大阪市立大学理学部	参加21名
		阿部 明 士	「イヌワンについて」
		塩田 猛	「インドで見た鳥」
		瀬戸 淳	「ケリ情報」
第10回例会	S 55.12.14	京都大学理学部	参加18名
		白附 憲 之	「金剛山の鳥について」
		須川 恒	「ツバメのねぐらについて」
		伏原 春 男	「アカマシコについて(標本供覧)」
第11回例会	S 56.3.15	伊丹労働福祉会館	参加6名
		坂根 隆 治	「東ネパールの鳥類調査紀行」
		坂根 千	「仲の神島の鳥(スライド映写)」
第12回例会	S 56.9.27	大阪市立大学理学部	参加19名
		山岸 哲	「モズの求愛行動」
		黒木 明	「中国自動車道の鳥影」
第13回例会	S 56.12.6	日本イタリア会館(京都)	参加17名
		藤岡 正 博	「アマサギにおける雛間競争ー兄弟殺しー」
		須川 恒	「琵琶湖でのオオパンの繁殖」

ご覧のように3・9・12月にそれぞれ兵庫・大阪・京都を会場にして年3回の例会を開いております。本会に参加を希望される方、又、会の様子を詳しく知りたい方は事務局まで御一報下さい。

なお、昭和57年度より事務局は下記の通りです。

〒606 京都市左京区北白川追分町 京都大学理学部 動物学教室 江崎保男 方  
日本鳥学会近畿地区懇談会事務局

(1982.3.31 文責 江崎保男)

## ハクセキレイとセグロセキレイの進化史にせまる

— 1983年度大会へのお誘い —

ここ数年、鳥学会大会は毎年盛りあがってきています。参加者の人数が増えているだけでなく、講演の発表内容も多岐にわたり、しかも充実してきています。特に昨年の仙台大会は非常に盛会で、一般講演、シンポジウム、エキスカージョン、それに初めての試みであったポスター展示など、十分に楽しむことができました。

さて、今年の東京大会は、場所が都心であることから、エキスカージョンは行なわれないことになりました。しかし、その分、一般講演とポスター展示とシンポジウムに力を入れたいと考えています。これまでは、発表者と聞く側の人との間に壁のようなものがあり、たとえばシンポジウムなどは、シンポジウムというより講演会のような趣きをもっていました。今年はそうした壁をとり除き、おおいに議論したいと思います。その点、ポスター展示には、発表者と聞く側との間でかなり自由なやりとりができるので、お互いに得るところが多いものと思われま

そこで、今大会の目玉の一つであるシンポジウム「ハクセキレイとセグロセキレイの分布と生態」について、その企画意図をご説明しておきたいと思

ハクセキレイ *Motacilla alba* は、ユーラシア大陸に分布しており、それぞれの地域で羽色や大きさの異なるいくつもの亜種に分かれています。そうした中で、2つの地域個体群が繁殖期にも分布を重ね、共存している地域が2か所あります。ひとつはインドの北方、カシミールで、もうひとつは、日本です。

こうしたいわゆる同所性にある2つの個体群は、いくら近縁でよく似ていても、同じ種とみなすわけにはいきません。同じ地域にすんでいるにもかかわらず、互いの特徴を維持している、つまり交雑してはいないからです。そこで、インド固有の繁殖個体群はオオハクセキレイ *M. maderaspatensis*、日本固有の繁殖個体群はセグロセキレイ *M. grandis* として、別種にされているわけです。

さて、日本のセグロセキレイとハクセキレイの繁殖分布域の重複は、かつては北海道と本州の北部に限られていました。ところが、ここ10年ほどの間に、ハクセキレイの繁殖分布が北と南から次第に伸びてきたために、重複域は非常に広がりました。そして、すでに一部の地域では、ハクセキレイの北方系の亜種 *M. a. lugens* と南方系の亜種 *M. a. leucopsis*、それにセグロセキレイの3者が、同一地域で繁殖するようになっています。

今回のシンポジウムは、こうしたハクセキレイやセグロセキレイのたどってきた道、および現在の状況に焦点をあて、その種分化の様相をさぐってみようというのがねらいです。議論される問題点としては、主に次のようなものがあります。1) 日本におけるハクセキレイとセグロセキレイの共存の歴史、2) 両種のすみ場所や採食習性の違い、3) 両種の繁殖習性の違い、4) 2)と3)にかかわる地域的差違、特に共存の歴史の異なる北海道、本州、九州などでの状況差、5) 両種間およびハクセキレイの異亜種間の交雑の可能性。

最近、これらセキレイ類の分布や生態に関心を持ち、観察、研究している人の数は、かなり多いように見受けられます。そうした人たちを含めてたくさんの方がこのシンポジウムに参加し、議論に加わって下されば、この興味深い研究テーマは、今後さらに多くの人によって詳しく研究されることになるでしょう。

今年度大会に、なるべく多くの方が参加して下さることを望みます。

(文責・樋口広芳)

## 評議員および監事選挙結果

1983年3月19日に開票された評議員および監事の選挙結果は下記の通りです。投票総数174票、有効票数160(無効票14)。○印は当選者。なお、小林桂助氏は辞退され、次点の中坪礼治氏も辞退されたため、羽田健三氏が繰り上げ当選と決りました。なお任期は2年(1984年12月31日まで)。なお、4月24日、山階鳥類研究所で開かれた評議員会では、会頭に黒田長久氏、副会頭に中村登流氏を推薦しました。

(庶務幹事 唐沢孝一)

< 評議員 >                      ○黒田 長久 133, ○中村 登流 128, ○樋口 広芳 127,  
○森岡 弘之 123, ○山岸 哲 120, ○唐沢 孝一 115, ○阿部 学 111,  
○吉井 正 94, ○竹下 信雄 89, ○中村 司 83, ○柿沢 亮三 82,  
○柴田 敏隆 80, ○藤巻 裕蔵 78, ○長谷川 博 76, 小林 桂助 72(辞退),  
次点、中坪 礼治 69(辞退), ○羽田 健三 68(繰り上げ当選), 川内 博 58,  
福田 道雄 50, 風間 辰夫 48, 宗近 功 47, 由井 正敏 45,  
千羽 晋示 43, 松岡 茂 41, 横田 義雄 20, 坂根 隆治 13,  
菊地 昶夫 12, 望月 和男 9, (以下省略)

< 監 事 >                      ○森岡 照明 58, 吉井 正 43(評議員当選),  
○千羽 晋示 42, 石崎 夏夫 42, 川内 博 34, 坂根 千 33,  
(会則) 同数の場合、弱年者が当選                      横田 義雄 22

### < 鳥の発行予定と原稿締切りについて >

鳥32巻2/3号は10月ごろの発行を予定しています。また、4号の原稿を募集しています。10月末日までに学会宛お送り下さい。

### < 鳥のバックナンバー残部僅少! >

鳥のバックナンバーを販売しておりますが、残部僅少の号が多くなっています。購入希望者は必ず学会事務所へお問い合わせ下さい (以上 森岡弘之)

### < 次号予告……特集・海鳥 >

10月には「日本海鳥グループ」が発足予定です。興味ある方は下記へお問い合わせ下さい。〒274 船橋市三山2-2-1 東邦大学理学部海洋生物研究室 長谷川 博(電)(0474)72-1141(内線)353

### — 編集後記 —

この号からタイトルが、本鳥学会ニュースから鳥学ニュースに変わったことにお気づきでしょうか。学会からのお知らせではなく、鳥類学の情報誌への第1歩です。今回は脱皮しきれていませんが、だんだんと変身していくはずです。ご意見・ご投稿を歓迎します。(川内)

鳥学ニュース                      No. 11 (7/12月発行)

1983年7月15日 発行 (会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒160) 東京都新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館分館内 (電話) 03(364)2311 (振替) 東京1-6599

発行人 黒田長久 編集者 川内 博・長谷川 博 印刷所 文英社印刷